美術博物館の催し

問い合わせ　美術博物館　☎38-5432(〒659-0052 伊勢町12-25)

■秋の連続ワークショップ「いつもの世界、いつもとちがう世界」

ふだんの何気ない「うごき」を"少し変わった方法"で体験してみませんか？　いままで気付かなかった「ふしぎな感覚」のトビラを見つけにいきましょう！
■日時・内容　①11月４日(土)午後１時30分～３時30分「はいる・でる」②11月26日(日)午前10時～午後４時「あるく・はこぶ」③12月17日(日)午後１時30分～３時30分「すう・はく」■会場　①体験学習室・ホール・庭②芦屋川河口～高座の滝(往復)③ホール・展示室・庭　■対象　どなたでも可。小学生以下のかたは親子で　■定員　各回20人　■参加費　各回200円　■講師　①③井須圭太郎(本館学芸員)②山形隆司(本館学芸員)　■申し込み　往復はがきに、住所・氏名・年齢・電話番号・講座名(１回の場合は希望日を、連続参加の場合はその旨)を明記し、10月23日(月)必着で上記へ。＊応募者多数の場合は抽選。

■心の時代「仏教入門」　- 文化財にみる 仏教の心-

「挨拶(あいさつ)」「縁起」「行儀」など、日常的に使う言葉や私たちの何気ない習慣に仏教は影響を与えています。本講座では、仏教にかかわる文化財についてお話します。
■日時　①11月８日②12月13日③平成19年１月10日④２月14日⑤３月14日(第２水曜日)、いずれも午後２時～３時30分　■会場　美術博物館講義室　■定員　40人　■参加費　5,250円＜全５回＞　■講師　①元興寺文化財研究所・高橋平明氏②本館学芸員･山形隆司③奈良国立博物館・西山厚氏④関西大学講師・山崎善弘氏⑤本館学芸課長・明尾圭造　■申し込み　往復はがきに、住所・氏名・年齢・電話番号・講座名を明記し、10月23日(月)必着で上記へ。＊応募者多数の場合は抽選。

■アーティストと話そう　- 芦屋から世界へ、GUTAIの場合-

アーティストは作品をつくるとき何に注目しているのか、日常生活で何をおもしろいと感じているのか、元「具体美術協会」の皆さんをお招きし、直接お話を伺います。
■日時　①11月３日(祝･金)②12月９日(土)③平成19年１月13日(土)④２月10日(土)⑤３月10日(土)、いずれも午後２時～３時30分　■会場　美術博物館講義室　■定員　35人　■参加費　5,250円＜全５回＞　■講師　①嶋本昭三氏、鷲見康夫氏②浮田要三氏、山崎つる子氏③上前智祐氏、堀尾貞治氏④前川強氏、松谷武判氏、向井修二氏⑤白髪一雄氏(ビデオでの講義)、元永定正氏／聞き手：本館学芸員･加藤瑞穂　■申し込み　往復はがきに、住所・氏名・年齢・電話番号・講座名を明記し、10月23日(月)必着で上記へ。＊応募者多数の場合は抽選。

谷崎潤一郎記念館の催し

問い合わせ　谷崎潤一郎記念館　☎23-5852(〒659-0052 伊勢町12-15)

【ロビーギャラリー】「陶とジュエリー二人展」

■期間　10月27日～11月19日　■内容　陶芸作家・近藤知子と彫金作家・飯島恵里の二人展

【文学館講座】「日本の伝統俳句」講座 ＜全６回＞

■日時　11月25日・12月23日・１月27日・２月24日・３月30日・４月28日(第４土曜日中心)、いずれも午前10時～11時30分　■会場　谷崎潤一郎記念館講義室　■講師　ホトトギス同人・黒川悦子氏　■受講料　各回2,500円(申し込み時に３回分支払い)　■定員　20人

【文学館講座】「楽しくスケッチ」講座 ＜全６回＞

■日時　11月22日・12月６日・20日・１月10日・24日・２月14日(第２・４水曜日)、午前10時30分～正午　■会場　谷崎潤一郎記念館講義室　■講師　ＪＲ西日本ジパング倶楽部講師・井上正三氏　■受講料　各回2,500円(申し込み時に３回分支払い)　■定員　20人

【文学館講座】「"ちょっといい文章"書いてみませんか」講座＜全６回＞

■日時　11月23日・12月21日・１月25日・２月22日・３月29日・４月26日(第４木曜日中心)、午後２時～３時30分　■会場　谷崎潤一郎記念館講義室　■講師　大阪芸術大学講師・篠原嘉彦氏　■受講料　各回2,500円(申し込み時に３回分支払い)　■定員　20人

市制施行50周年記念写真集「芦屋のうつりかわり」を頒布

写真でみる芦屋の歴史

市制施行50周年(平成２年11月10日)に発行した記念写真集「芦屋のうつりかわり」の在庫本を、行政情報コーナー(市役所北館１階)、ラポルテ市民サービスコーナーで頒布しています。

「芦屋のうつりかわり」
21.6×30.5㎝／135頁／
紙表紙･銀箔押し(ハードカバー)
頒布額　500円

◀大正時代中ごろの海水浴風景

問い合わせ　広報課　☎38-2006

あしやの民話④ あしや沖の竜灯

●文・あしや民話の会
●絵・竹本温子さん

むかし、あしやの海の沖に、竜の神さま竜神が住んでおった。
竜神さまは、それはそれはたくさんの魚たちを取り仕切っておった。
竜神さまは、嵐がふいても、強い魚がおそってきても、安心して暮らせるように魚たちを守っておったのや。
ある日のこと、竜神さまはうとうとと昼寝をしとった。その耳もとで、小さい魚がありったけの声で、
「竜神さま、起きてください。眠っておられるどころじゃありませんよ。一大事です」と叫んだ。
竜神は飛び起きた。
「何、一大事だと」
その声に、小さい魚も、跳びのいた。
「申し訳ありません。せっかくのお休みのところを起こしてしまいました」
「それより早く申せ、どんなことか」
「はい、そ、それが、くじらがここへやって来るとか」
「なに、くじらが、だれがそんなことを」
小さい魚は、もっと体を小さくしていうた。
「紀州の友だちが、急いで知らせてくれました」
「くじらが来るのは、いつじゃ」
「そ、それが、今夜」
「なに今夜、ばかもん。それが、ほんとうなら、こんなことをしておれん。早く、ここに、みんな集まるように知らせるのじゃ」
そういった竜神さまやが、いつになくあわてしもうた。まだ一度も、くじらを見たことがなかったし、何の用で来るのかわからんかった。
もし、大きい口で、魚たちがパクリとやられてしもうたらと、心配もした。
しばらくして、たくさんの魚たちが集まってきた。竜神さまはいうた。
「みんなを集めたのは、ほかでもない。大きなくじらがここへ来るというのじゃ。それも、今夜じゃ」
魚たちは、急にざわめきだした。自分たちが食べられてしまうと思いだしたからやった。
「おちつけ、おちつくのだ」
竜神さまはそういうたが、一番あわてているのは、くじらなんて見たこともない竜神さまやった。
その時、そんな竜神さまを助けるように、百年も生きつづけているといわれる年とった魚がいうた。
「みなのもの、よくきけ。くじらがここへくるというが、決しておまえたちを食べるためではない。魚なら紀州にぎょうさんおる。ここまでくる必要がないのじゃ。きっと、われらの竜神さまに、あいさつしに来るのであろう。それならば、お客としてむかえなければならん。長いこと竜灯はしていないが、今夜、行おうではないか。さあ準備じゃ、準備じゃ。
魚たちは、海草や岩で体がピカピカに光るまでみがけ。そして光る石や貝がらなど口にくわえるものをさがしておけ。さいわい、今夜は満月じゃ、りっぱな竜灯の夜になるぞ」
それを聞いた竜神さまも喜び、さっそく準備にかかった。

日が西の海を赤くそめるころ、あしやの海べに、人がひとりふたりと増えはじめた。そして、みるみるうちに大ぜいの人だかりになった。
海の漁師が、いつもとちがう海の色をみて、今は伝え話しになっている竜灯が今夜見られるのでないかと騒ぎだした。
百年に一回といわれる竜灯である。生きている間に、それが見られるとあれば、こんな幸せはないと寄ってきた人たちであった。
竜灯とは、海の神さま竜神に、魚たちが感謝のおまつりをすることであった。
日が月にかわると、その弱い光の中で、白く黄色に海が輝きだした。
人々のどよめきが期せずして起きた。
海の上が小さくキラキラと光りだした。その光が、帯のようになって風の向きと反対に流れだした。
一つ一つの光は、一つ一つの魚のかざすろうそくのような灯り、それはもう光の帯であった。
月は上り、まっ黒の海の色にはえて、見事な大きな絵巻ものになった。
人々のため息がもれはじめると
「竜灯や、竜灯や」の声があたりにし始めた。
それは、長い時間ではなかったが、しばらくの間、人々を浜にくぎづけにした。
その夜、くじらは来たのか、来なかったのか、魚たちは知らない。
竜神さまもそうだ。光の中にいて、大そう満足であったから。
しかし、そのときから、あしやの浜で今夜のような見事な竜灯りを見たものは、だれもいない。

●「あしやの民話」は、芦屋に語り伝えられていたお話を、三好美佐子先生をはじめ、民話を研究するグループの皆さんが収集整理し、やさしく民話の形に整えられ、平成十一年に発行されたものです。